ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告63

富山市黒瀬大屋遺跡
発掘調査報告書

くろせおおや

2014

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告63

富山市黒瀬大屋遺跡
発掘調査報告書

くろせおおや

2014

富山市教育委員会

例　言

1．本書は、富山市黒瀬字大屋割に所在する黒瀬大屋遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査の期間、発掘面積、調査担当等は次のとおりである。

試掘調査　平成21年3月24日　対象面積990㎡　　遺跡所在確認面積510㎡

調査担当 富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　鹿島昌也

同　嘱託　小林高太

検証調査　平成21年5月26日

調査担当 富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　鹿島昌也

同　嘱託　小林高太

発掘調査　平成21年6月2日～平成21年6月16日発掘面積50㎡（損壊部分のみ）

調査担当 富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　鹿島昌也

同　嘱託　長谷部真吾、小林高太

出土品整理・報告書作成平成25年5月7日～平成26年3月31日

担当 富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員　鹿島昌也

3．本書の執筆は、鹿島、埋蔵文化財センター嘱託 新川廣久（～平成24年度）が行った。

4．出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

5．調査にあたり、廣田司法書士・土地家屋調査士事務所の協力を得た。

凡　例

本書の挿図・写真図版等の表示は次のとおりである。

(1) 方位は真北、水平基準は海抜高である。

(2) 座標は国土座標（日本測地系）を使用した。

(3) 遺構の表記は次の記号を用いた。

ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑、Ｐ：柱状ピット

目　次

第Ⅰ章　調査の経過……1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……1

第Ⅲ章　調査の概要……4

第Ⅳ章　総括……11

参考文献

写真図版……12

報告書抄録……18

第Ⅰ章　調査の経過

黒瀬大屋遺跡は、富山市教育委員会（以下、市教委と略す）が実施した市内分布調査（昭和63年度～平成3年度）により、新たに確認された遺跡である。以後、富山市遺跡地図に登載し、周知の埋蔵文化財包蔵地（市遺跡№201479）として取り扱うこととなった。遺跡の推定面積は200,000㎡である。遺跡は弥生時代後期、奈良・平安時代、中世、近世の集落跡と周知されていた。

平成21年2月17日に富山市黒瀬字大屋割地内において、個人住宅建築及び宅道新設にかかる埋蔵文化財の所在確認依頼書の提出されたため、開発予定地全域の990㎡を対象に試掘調査を実施することとした。

試掘調査　平成21年3月24日に試掘調査を実施した。その結果、対象地の西寄りの宅地予定地部分510㎡に遺跡の所在を確認した。厚さ25～35cmの表土（水田耕作土・床土）の下に、厚さ10cmの遺物包含層があり、その下に平安時代の遺物が出土する旧河道や溝・土坑などを検出した。出土遺物には、古墳時代の土師器や飛鳥時代の須恵器、平安時代の土師器・須恵器、江戸時代の越中瀬戸焼があった。同月31日付けで試掘調査結果を窓口となった廣田司法書士・土地家屋調査士事務所の行政書士を通じて施主宛に送付した。遺跡の所在が確認されたことを受けて、試掘結果通知書をふまえて工事着手前に施工業者に打ち合わせに来るよう行政書士に伝えた。

しかし、施工業者との打ち合わせがないまま、5月15日に盛土造成を行ったとの報告を受け、同月18日に現地確認を行ったところ、遺跡の保護層部分の掘削が見込まれたため、同月19日に検証のための試掘を行った結果、一部で遺物包含層が掘削を受けていた。

このため、5月21日に市教委と行政書士、施工業者を交えた3者協議を行い、遺跡が損壊されていないか検証する調査を行うこととした。

検証調査　5月26日に損壊の有無を検証するための詳細な検証調査を、宅地として造成した部分430㎡を対象に実施した。その結果、旧表土（厚さ約20cm）が全域にわたって除去されたことを確認し、うち遺跡が損壊を受けた面積は135㎡に及ぶことが判明した。

発掘調査　検証調査で損壊が確認された135㎡について、6月2～3日に表土（造成土）を除去し、実際に損壊を受けた箇所を平面的に確認した。調査区の北寄りで3箇所（内2か所はほぼ繋がっている）、南寄りで1箇所の造成時に開削されたとみられる不整形の掘削穴を確認した。掘削穴の直径は約3m、深さは現地表面から110～130cmにおよび、掘削穴の底面は包含層途中で止まるものと地山面まで達するものがみられた。掘削穴3箇所、合計約50㎡については、遺物包含層や遺構面の露頭、土器などの出土がみられたことから、遺構や遺物の記録保存を要すると判断し、この約50㎡について6月9～12日にかけて、発掘調査および測量作業を実施した。（鹿島）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

遺跡は、富山市街より南へ約4ｋｍの富山市黒瀬地内に位置する。本遺跡は大きくは神通川と常願寺川に挟まれた扇状地にあり、小さくは、神通川の支流の熊野川と土川に挟まれた微高地上に立地している。周辺の現在の標高は約17ｍを測るが今回検出された遺構検出面の標高は16ｍ前後である。遺跡は弥生時代後期、奈良～平安時代、中世、近世の遺物が出土す

る埋蔵文化財包蔵地で、その全体の面積は約20万㎡に及ぶ。平成15年度には黒瀬字大屋割で実施した共同住宅建設に先立つ発掘調査で古代の井戸や土坑がみつかり、古代の集落跡の存在がうかがわれる（県埋蔵文化財センター2004）。

本遺跡周辺には縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が広範囲に所在する。縄文時代、特に晩期になりこの扇状地上に遺跡が出現するようになる。それらの大半は、段丘に程近い部分に位置しており、石田遺跡や吉岡遺跡、大利屋敷遺跡、任海宮田遺跡などが知られる。

弥生時代には、熊野川下流域に本遺跡が形成されるのみで、周辺の遺跡分布は希薄になる。

古墳時代には、大沢野台地北端に墓域の形成がみられる。その代表的な遺跡である伊豆宮古墳（7世紀前葉）は、15ｍ×23ｍを測る方形墳もしくは変形八角形墳である。河原石積みの横穴式石室内から須恵器をはじめ、馬具・刀子・紡錘車・鉄器片などが出土した（藤田1996）。

奈良～平安時代に至っては、主として神通川と熊野川に挟まれた地域に大集落が形成されるようになる。集落遺跡の大規模な展開は、この時期多数の人々の集住によって本遺跡を含む扇状地西側地域の開発が進んだことを示している。任海宮田遺跡や吉倉Ａ遺跡、吉倉Ｂ遺跡、南中田Ａ～Ｄ遺跡、栗山楮原遺跡、友杉遺跡、上新保遺跡などで多数の竪穴建物や掘立柱建物の痕跡が確認されている。南中田Ｄ遺跡では竪穴建物61棟、上新保遺跡では約100棟の竪穴建物と掘立柱建物が検出された。特に任海宮田遺跡でも100棟をこえる竪穴建物や掘立柱建物が発掘され、廂付の大型掘立柱建物も検出されている。また、仏教的活動をうかがわせる奈良三彩火舎･鉄鉢型土師器が出土し、緑釉陶器･円面硯･石帯などに混じって「城長」、「観音寺」、「寺」、「墾田」などと記された墨書土器も800点以上出土し、古代寺院や公的施設の存在が推測されている（富山市教委2009）（県財団2008）。

中世になっても引き続き、吉倉Ａ遺跡、吉倉Ｂ遺跡、南中田Ｂ遺跡、上新保遺跡などの集落では、掘立柱建物を中心とした集落が重複して立地していたようである。熊野川の東側には、上熊野城や布市城などの城跡や寺院跡、豪族蜷川氏の館跡など中世起源の遺跡が多く分布する。さらに、中世の集落遺跡群として知られる吉倉Ａ遺跡、吉倉Ｂ遺跡、南中田Ａ遺跡、任海鎌倉遺跡などの地域一帯は、徳大寺家領宮河荘に比定される。同家は、藤原閑院流の出で、大治元（1126）年に徳大寺公能が越中国守に任ぜられたことを機に、私領を形成したと考えられる。『徳大寺家当知行之目録』（1533年）によれば、全国に散在する同家領の中でもその筆頭に「越中国般若野庄園領家方同国宮河庄園」とあり、越中国に大規模な荘園を領有していたことが裏付けられる。近隣では熊野川と土川に挟まれた黒崎種田遺跡で、12～13世紀を主体とする建物跡などの遺構が発掘されている（富山市教委2005）。

近世には、大規模かつ広範囲に水田開発が進んだ時期である。経済の発達とともに本遺跡付近は、飛騨街道や八尾道、岩木道が交差する交通の要衝となった。また、熊野川とその支流を利用した舟運も発達し、現在の産業展示館（友杉）付近では、舟からの荷物の積み下ろしも行われていた。（新川）

参考文献

㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2008『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』

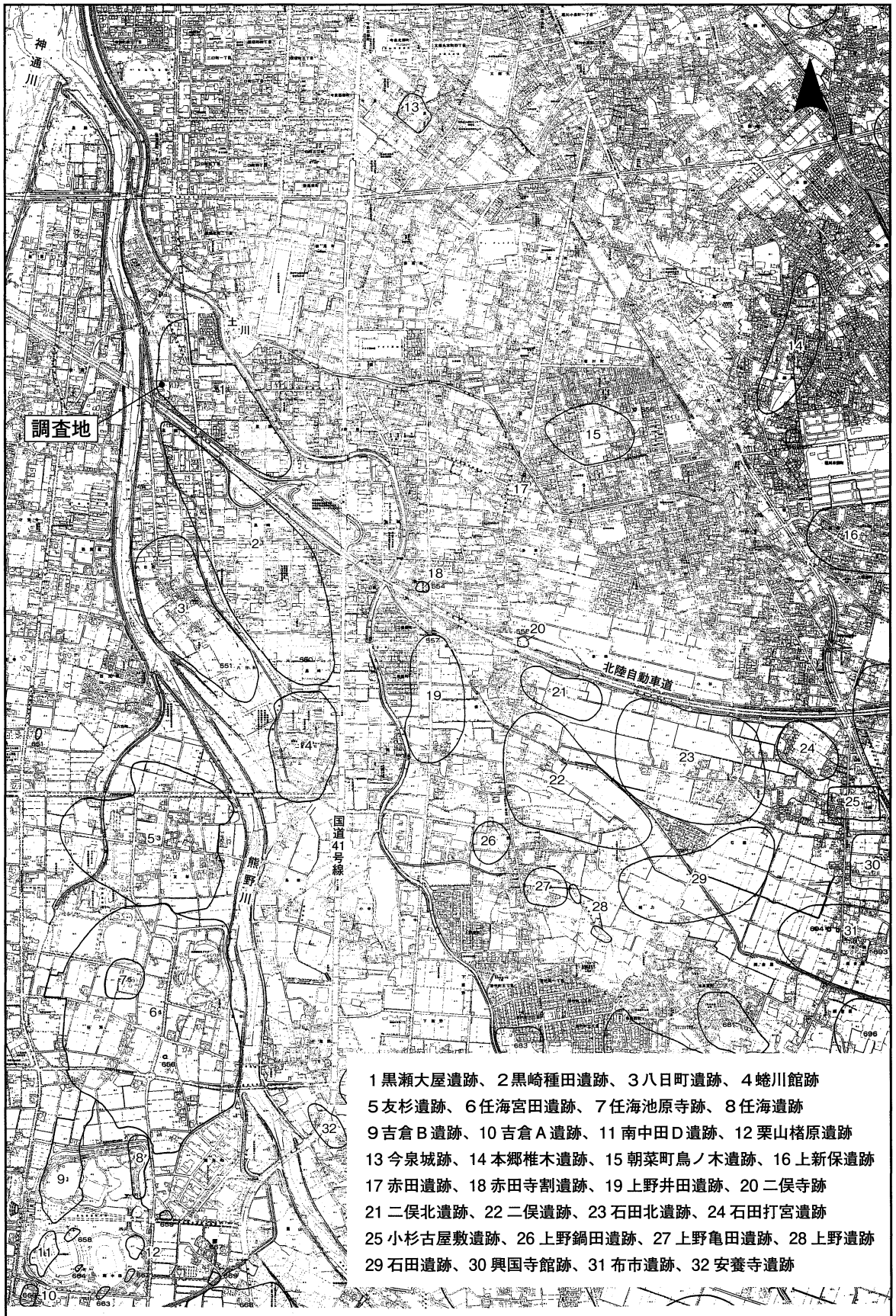
富山県埋蔵文化財センター 1994『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4)吉倉Ｂ遺跡』

富山県埋蔵文化財センター 2004『富山県埋蔵文化財センター年報―平成15年度―』

富山市教育委員会 2005『富山市黒崎種田遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2009『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』

藤田富士夫 1996「伊豆宮古墳の変形八角形墳試考」『富山市考古資料館報』No.30 富山市考古資料館



第1図　黒瀬大屋遺跡と周辺の遺跡（1：25,000）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

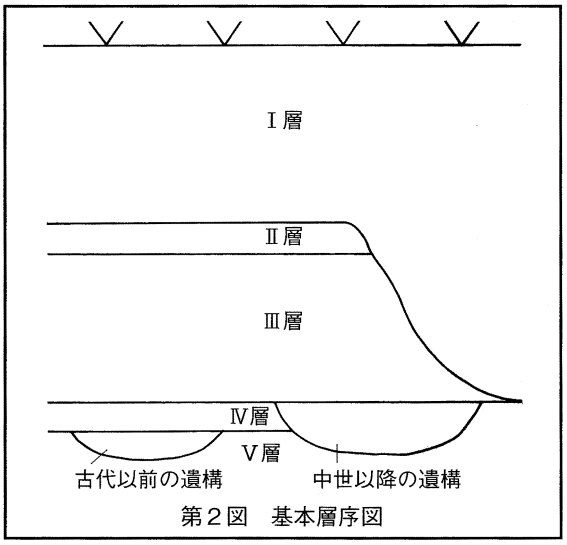
検証調査で遺跡の損壊が確認された135㎡について、造成土をバックホウを用いて漉き取りを行った。この時点で、旧耕作土がほぼ削平されていることを確認した。そこからさらに掘り込んだ不整形の掘削穴３か所（１区・２区・３区）がみつかった約50㎡について、埋土の造成土をバックホウ及び人力により掘削を行った。造成土は地山面まで達しているものや遺物包含層の途中で留まっているものも見られた。この不整形の掘削穴の範囲約50㎡について、人力による包含層掘削・遺構検出作業を行い、遺構掘削作業と並行して測量・図面作成作業といった発掘調査による記録保存を行った。

遺構は、断面観察用の畔を残して掘削し、土層断面の堆積状況を写真と図面に記録した。遺物が出土した遺構は、遺物出土状況写真と図面に記録した後完掘した。遺構と遺物は光波測量機器（トータルステーション）を使用して位置と高さを記録した。

第２節　基本層序

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。盛土造成工事後の現況層序を示す。

熊野川右岸に位置し、Ⅲ層では、洪水の影響とみられる砂層堆積が含まれ、古墳・飛鳥・平安・中世・江戸など様々な時代の遺物を包含する。遺構はⅣ層上面とⅤ層上面で検出された。Ⅲ層途中にも断面観察で溝状の落ち込みがみられるが、造成による攪乱のため平面的に捉えることはできなかった。



第２図　基本層序図

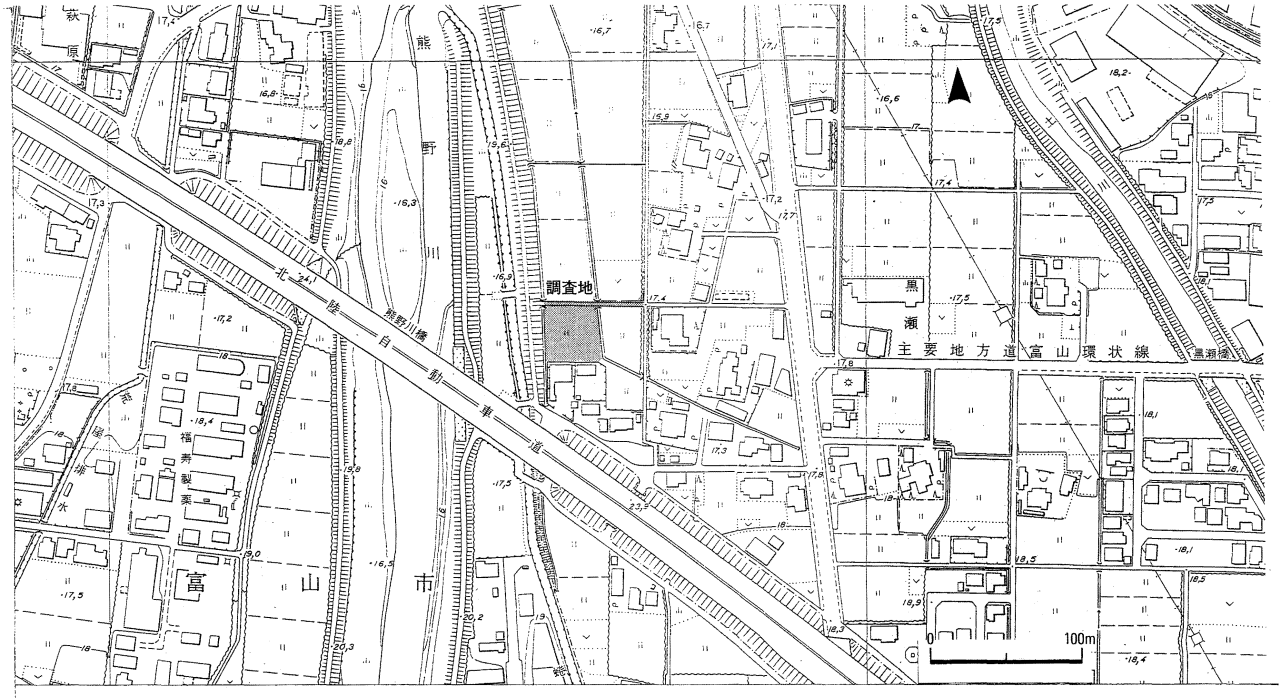
Ⅰ層：層厚60～70cm　造成土（損壊部分は部分的　　に120cm以上の掘削穴になる）
Ⅱ層：層厚10cm　　水田床土（黄褐色土）
Ⅲ層：層厚50cm　　遺物包含層（暗褐色土、暗灰色土、白灰色砂や黄灰色砂層混じる）
Ⅳ層：層厚10cm　　下層遺物包含層（暗褐色粘質土）
Ⅴ層：　　地山（黄灰色砂質土、下部に河原石多数含む）

第３節　遺構

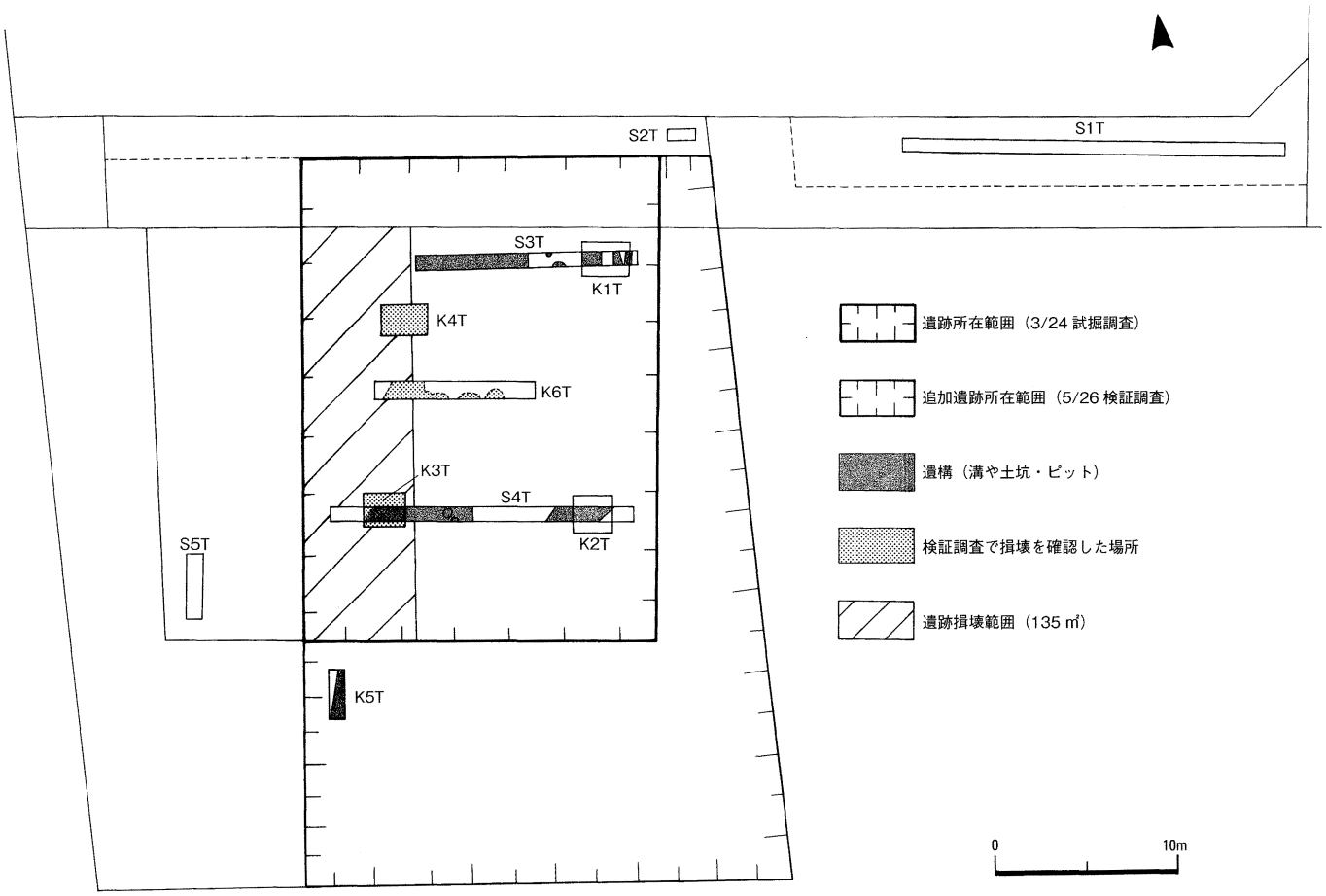
第１項 試掘調査の遺構（第４図、写真図版１）

平成21年３月に実施した試掘調査で設定したトレンチ溝と５月に実施した検証調査で設定したトレンチ溝とを区別するため、３月の試掘調査トレンチをS1 T～S5 Tとし、５月の検証調査トレンチをK1 T～K6 Tとした。

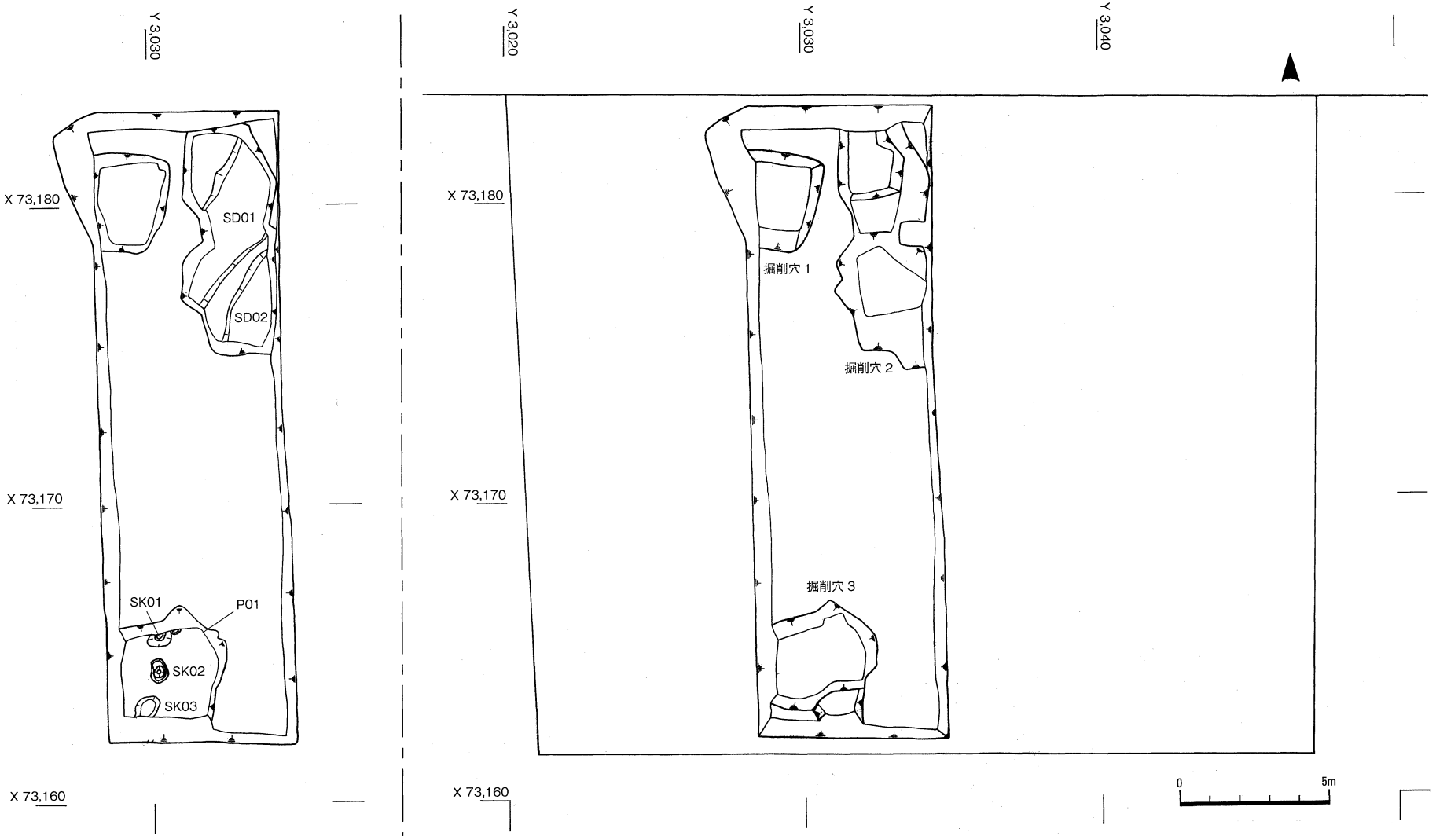
旧農道の北側拡幅部分（S1 T･S2 T）では、若干遺物の出土を見たが遺構は確認されなかったため、遺跡所在範囲からは除外した。S3 Tでは、幅0.5～１mを測り南北方向にのびる溝や穴のほか、西側に向かって傾斜する谷状の地形あるいは大溝とみられる遺構の東肩を検出した。S4 Tでは、幅約３mと６mを測り南北方向にのびる大溝を検出した。西側の溝内にはピットとみられる遺構も新旧関係があり、複数時期の遺構の所在が推測される。



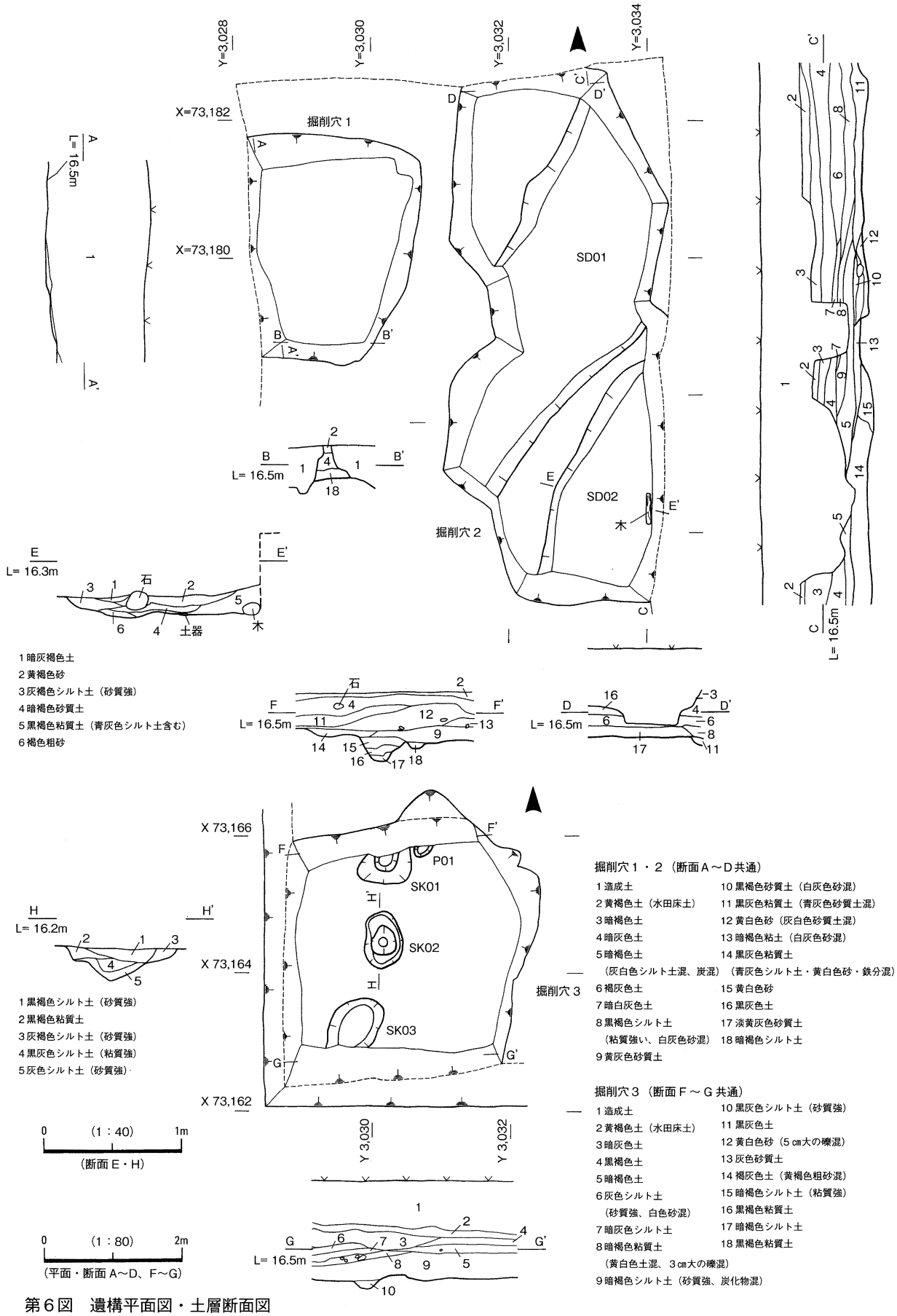
第３図　調査対象位置図（1：5,000）



第４図　遺跡所在状況図（1：400）



第５図　発掘調査遺構配置図（左）、遺跡損壊箇所（右）S ＝ 1/200



第６図　遺構平面図・土層断面図

第２項 発掘調査の遺構（第５・６図、写真図版２～４）

検証調査で確認した造成時に遺物包含層や遺構面を掘り抜いて掘削が及んでいた３か所の掘削穴を掘削穴１～掘削穴３と区別し、それぞれの掘削穴内について発掘調査し、記録保存を行った。

掘削穴１はほぼ地山面まで造成時の掘削が及んでおり、遺構は検出できなかった。掘削穴２で古代以前と中世以降の溝各１条、掘削穴３で古代以前の土坑３基、ピット１基を検出した。

ＳＤ０１　掘削穴２の北寄りに検出し、南西から北東方向に流れる。検出長 4.8 m、幅 2.85 m、深さ 0.25 mを測り、断面は台形を呈する。遺物は須恵器や珠洲焼が出土した。Ⅳ層上面からの掘り込みが確認され、中世以降の溝とみられる。

ＳＤ０２　掘削穴２の南寄りに検出し、南西から北東方向に流れる。検出長 3.5 m、幅 1.5 m以上、深さ 0.25 mを測り、断面は船底形を呈する。遺物は須恵器や流木とみられる木材が出土した。Ⅴ層からの掘り込みが確認され、古代以前の溝とみられる。

ＳＫ０１　掘削穴３の北壁に接して検出した。東西 0.8 m、南北 0.4 m以上の不整形を呈し、断面はＶ字形を呈する。覆土は黒褐色シルト土である。図化できないが、覆土中から古代以前とみられる土師器甕の体部破片が出土した。

ＳＫ０２　掘削穴３の中央やや西寄りで検出した。東西 0.55 m、南北 0.85 mの楕円形を呈し、断面はＶ字形を呈する。覆土は黒褐色シルト土である。図化できないが、覆土中から古代以前とみられる土師器甕の体部破片が出土した。

ＳＫ０３　掘削穴３の南壁に接して検出した。東西 0.7 m、南北 0.8 m以上の楕円形を呈し、断面はＵ字形を呈する。覆土は黒灰色砂質土で、覆土中から古墳時代の土師器甕体部片が出土した。

Ｐ０１　掘削穴３の北壁に接して検出した。東西 0.2 m、南北 0.2 m以上の楕円形を呈し、断面はＵ字形を呈する。覆土は、黒褐色粘土である。

第４節　遺物（第７・８図、写真図版５・６）

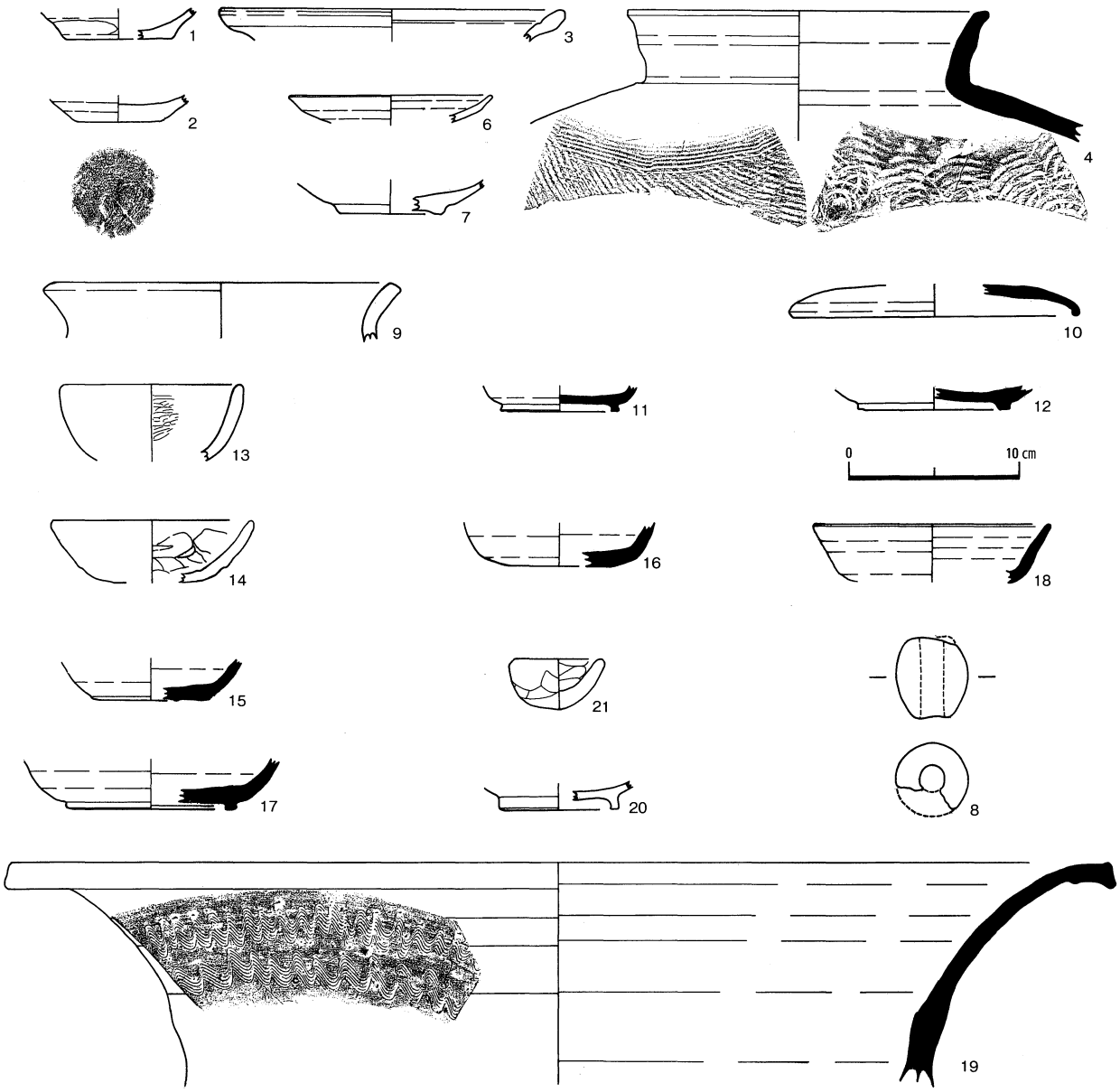
第１項 試掘調査の遺物

３月の試掘調査で出土した遺物である。白鳳～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代の遺物がある。

Ｓ１Ｔ　1・2は土師器皿である。2の底部に回転糸切痕がみえる。3は土師器甕の口縁部である。口縁端部が肥厚し、丸みを持って内折し、内側に段が付く。10 世紀前半。4は須恵器中甕の口縁～肩部である。短く立ち上がる口縁部の端部が外反する。外面平行叩きの後、肩部にカキ目調整を施す。内面同心円当て具痕は溝の幅が広い。7 世紀後半～ 8 世紀初頭。5は土製品で、何かの鋳型とみられる。外面被熱し軽い。6・7は越中瀬戸焼である。8は土錘である。1/4 ほど欠損するが、54 gを量る。

Ｓ３Ｔ　9は土師器甕の口縁部である。10 ～ 12 は須恵器で、10 は反しの付かない蓋、11・12 は有台杯の底部である。

Ｓ４Ｔ　13・14 は土師器の椀である。いずれも内面を磨いている。　15 ～ 19 は須恵器で、15・16 は無台杯、17 は有台杯の底部である。18 は杯あるいは高杯の杯部とみられる。19 は大甕の口縁部である。大きく外反する口縁の外面に区画のない波状文を二段にめぐらせる。7 世紀後半～ 8 世紀初頭。20 は内外面に緑釉が施された皿の底部である。21 は、手捏ねの小壺である。



第７図　試掘調査出土遺物実測図（S＝1/4）

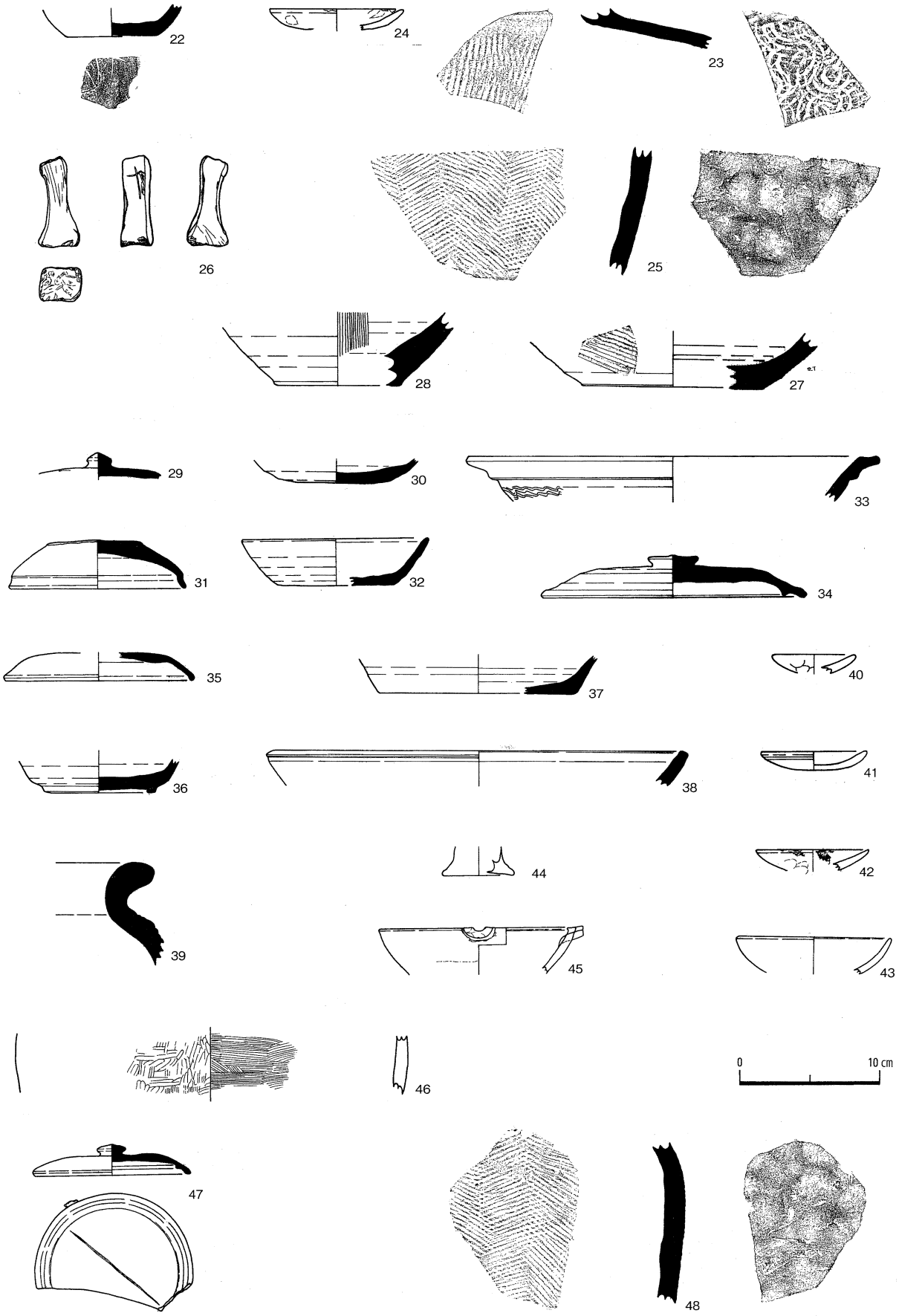
第２項 発掘調査の遺物

検証調査を受けて６月に実施した発掘調査で出土した遺物である。試掘調査同様、飛鳥～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代の遺物がみられる。

掘削穴２

ＳＤ０１　22・23は須恵器である。22は無台杯の底部で底部外面にヘラ記号を施す。23は甕の肩部で外面平行叩き、内面同心円当て具痕がみえる。24は非ロクロの中世土師皿である。口径9.5cm、口縁端部に煤が付着し、灯明皿として使用されていた。25～27は珠洲焼である。25は叩打壺の胴部である。外面は平行叩きを綾杉状に叩打し体部を多面体状にしている。吉岡編年Ⅱ期(吉岡1994)。26は砥石である。長さ6.3cm。27は壺の底部である。復元底径13cmを測る。28は片口鉢の体部下半～底部である。卸し目は１単位幅２cm、７目の鋭利な櫛歯原体を用いて施される。

ＳＤ０２　29～33は須恵器である。29は蓋である。小型の宝珠つまみを付す。30は無台杯(杯G）の底部である。31は杯H蓋とした。頂部はヘラ切り未調整で口縁部が垂下し端部がやや外反する。口径12.6cm、頂部径6.5cm、高さ3.5cmを測る。白色砂粒を密に含み、他の須恵器と胎土がやや異なる。内面が滑らかで、転用硯として使用された。陶邑編年TK46期並行、7



第８図　発掘調査出土遺物実測図（S ＝ 1/4）

世紀中頃。32は無台杯（杯A）である。口径13.0cm、底径8.5cm、高さ3.4cmを測る。底部回転ヘラ切り後撫でている。8世紀。
33は甕の口縁部である。大きく外反する口縁の端部外面を肥厚させる。口縁外面に波状文を施す。
包含層　34～37は須恵器である。34は返りのある杯B蓋である。外面上半部回転ヘラ削り後撫で、内面ロクロ撫で調整。口径18.6cm、高さ3.0cmを測る。7世紀第4四半期。35は返りのない杯B蓋である。内面ロクロ撫で、復元口径13.4cmを測る。36は杯B身である。底径7.7cmを測り、底部はヘラ切り後、やや撫でを施す。37は壺の底部である。底径14.0cmを測る。38・39は珠洲焼である。38は片口鉢の口縁部である。口縁は先細り方頭におさめる形態を呈する。復元口径約29cmを測る。吉岡編年Ⅱ期。39は甕の口縁～肩部である。端部をやや肥厚させ、くの字の円頭形を呈する。吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期。40～43は中世土師器の皿である。41・42の口縁外面端部に横撫でを施す。いずれもやや丸底気味で、43は深さがある。44は胎土の粗い手捏ね土師質の支脚とみられるものの台部である。45は古瀬戸卸皿の口縁部である。口縁端部を内側につまみ出す。口縁部に1か所片口が付けられる。口縁部をU字状に切り込み別の粘土を貼り込む。古瀬戸後Ⅲ期。
掘削穴３
ＳＫ０３　46は古墳時代の土師器甕の体部である。外面は刷毛後ミガキ、内面は刷毛で調整する。
包含層　47は返りのある杯A蓋である。口径11.0cm、器高2.3cmを測り、内面には大きな「一」のヘラ記号が付される。7世紀第4四半期。48は珠洲焼の叩打壺の肩～体部片である。外面は平行叩きを綾杉状に叩打し体部を多面体状にしている。吉岡編年Ⅱ期。49は被熱したヒトの上腕骨である。写真のみ。

第Ⅳ章　総括

造成時に表土が除去された135㎡の内、掘削穴1～3の約50㎡を記録保存のための発掘調査を実施した。非常に狭い範囲であったが、溝や土坑、ピットを検出し、本遺跡の集落の様相を垣間見ることができた。集落の時期は、古墳時代と白鳳時代と鎌倉時代の3時期と推測される。

古墳時代は、掘削穴3の土坑から古墳時代の土師器片が出土した。調査区全体からの遺物の出土は少量であるため、小規模な集落が営まれていたと推測される。

白鳳時代は、掘削穴2で溝跡が検出された。これまで周辺地区ではあまり確認されていない時期の遺物がややまとまって出土した。当該期における集落の縁辺部と推測される。

鎌倉時代は、近隣では黒崎種田遺跡において12～13世紀を主体とする掘立柱建物や井戸・土坑などが見つかっている。本遺跡から出土した珠洲焼が同遺跡の集落の時期に合致することから、調査地点は本遺跡から南東に約500m離れているものの何らかの関連が推測される。

（鹿島）

参考文献

池野正男 1993「富山県における生産開始期の須恵器窯跡について」『北陸古代土器研究 第3号』北陸古代土器研究会
池野正男 1995「越中・射水郡の7世紀後半の社会」『北陸古代土器研究 第5号』北陸古代土器研究会
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
内田亜紀子 2000「越中婦負郡の古代土師器煮炊具」『富山考古学研究』紀要第3号 ㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）第1分冊』
酒井重洋 1997「中世土師器の分類について」『埋蔵文化財調査概要』㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
瀬戸市歴史民俗資料館 1991『研究紀要X』
武田健次郎・青山晃・内田亜紀子 1999「越中における須恵器貯蔵具の様相」『須恵器貯蔵具を考えるⅠ　つぼとかめ 北陸古代土器研究 第8号』北陸古代土器研究会
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

写真図版1

試掘調査 S1T（西から）

S3T（東から）

S3T 遺物出土状況

S3T 土層堆積状況（南から）

工事着工前の写真（東から）

造成後検証調査作業状況（西から）

検証調査 K6T 損壊状況確認

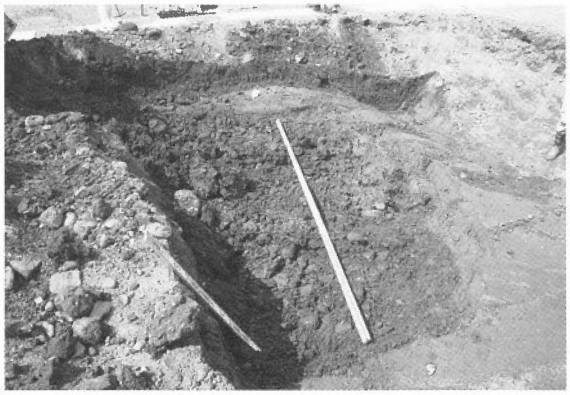
検証調査 K4T 損壊状況確認

検証調査 K5T 遺構検出状況（南から）

損壊範囲発掘調査着手前

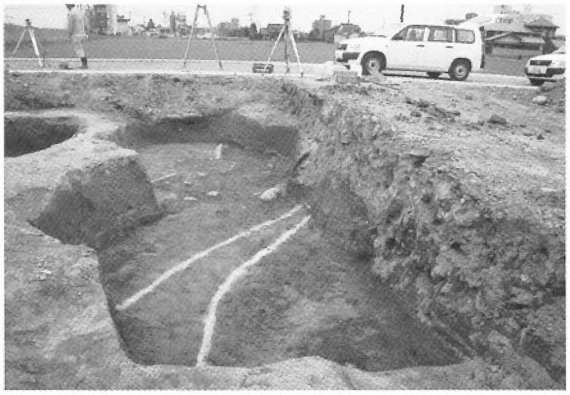
造成時の掘削穴埋土除去状況（北から）

掘削穴内遺構検出状況（北から）



掘削穴１ 検出状況（南から）

掘削穴１ 断面損壊状況（東から）

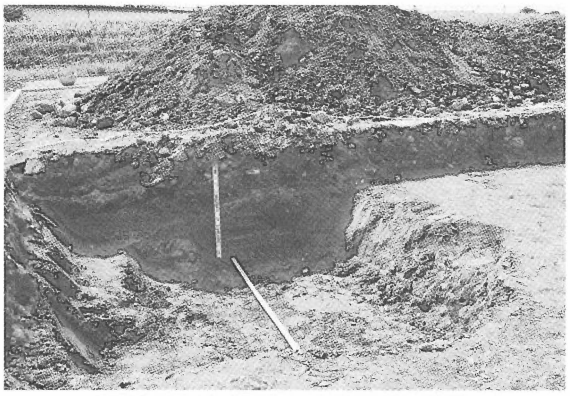


掘削穴２ SD01・02 検出状況（南から）

掘削穴２ SD01・02 完掘状況（南から）

掘削穴２ 東壁土層堆積状況

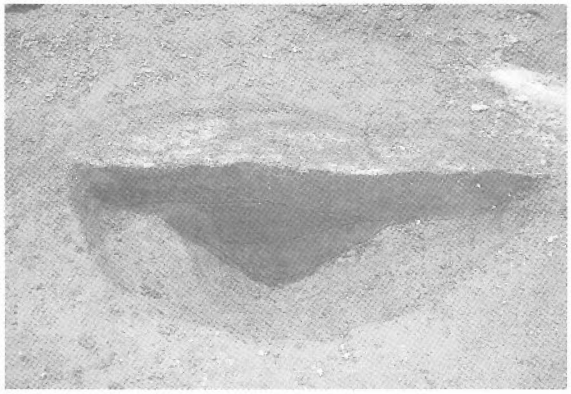
SD02 遺物（29）出土状況



掘削穴３ 造成時の埋土除去後の状況

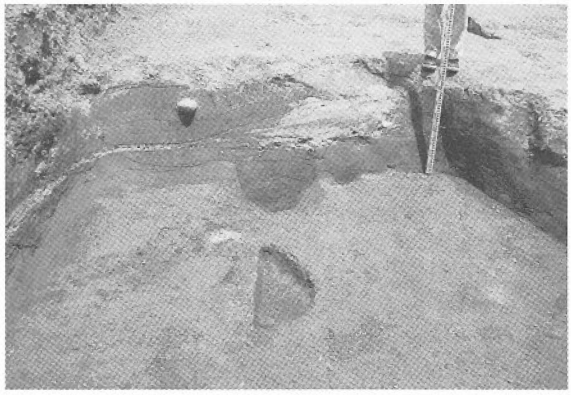
掘削穴３ 遺構検出状況（南から）

SK02 遺物出土状況（東から）



SK02 土層断面（東から）

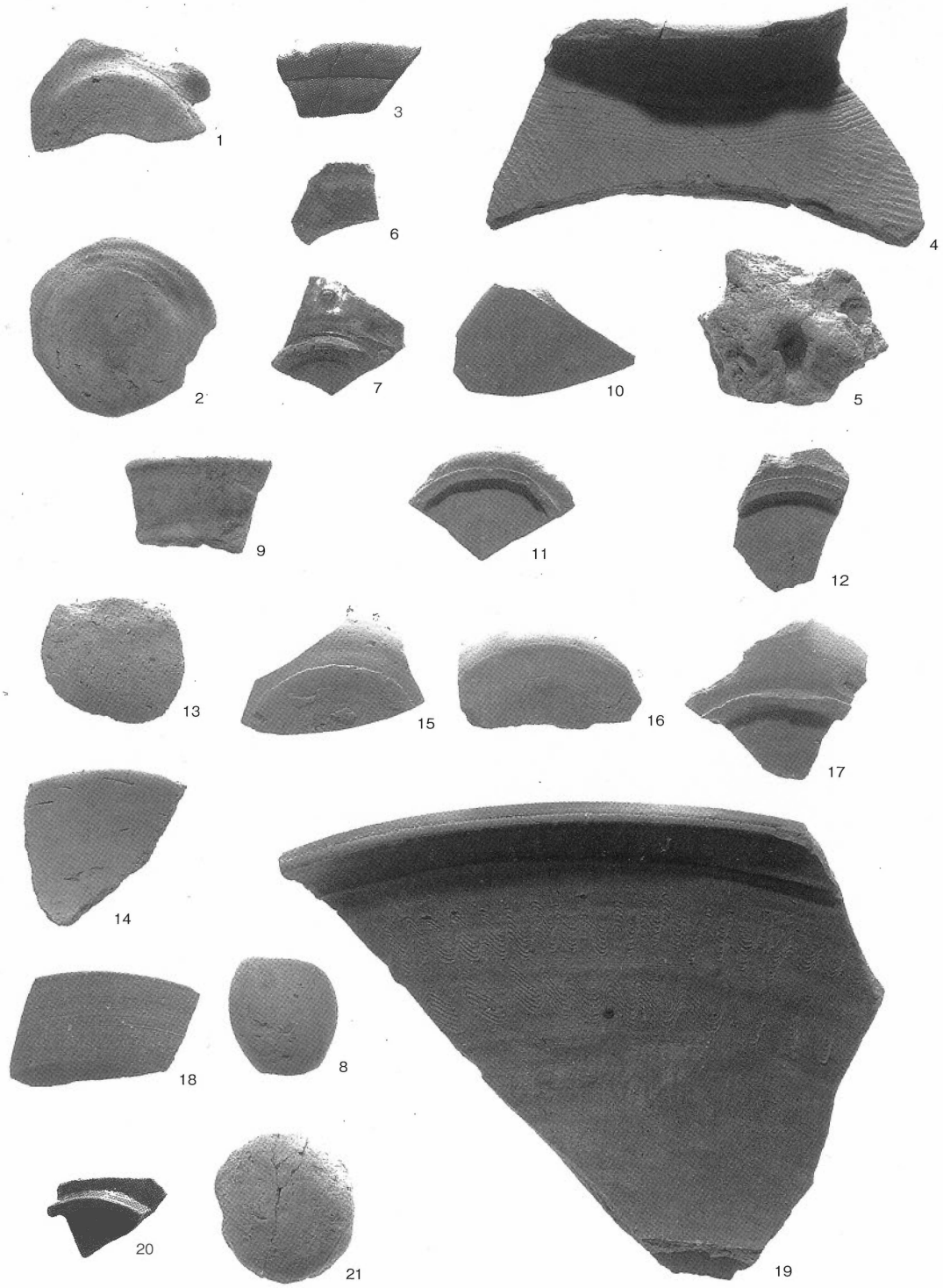
SK03 遺物出土状況（北から）



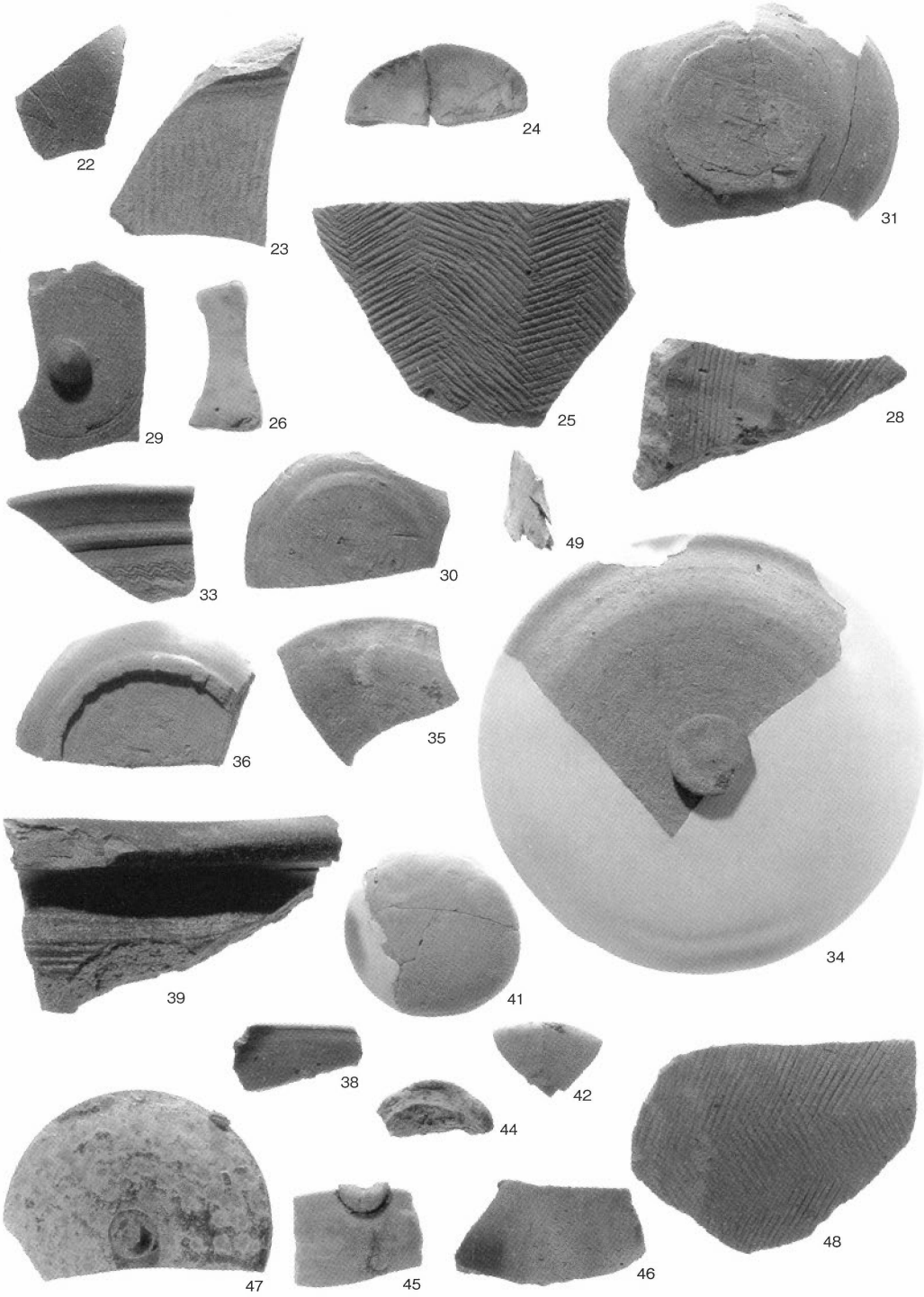
掘削穴３ 北壁土層堆積状況（南から）

発掘調査完掘状況全景（掘削穴１・２ 北から）

発掘調査完掘状況（掘削穴３ 南西から）



試掘調査出土遺物



発掘調査出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましくろせおおやいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	６３
編著者名	鹿島昌也　新川廣久
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒930－0091　富山県富山市愛宕町１－２－２４　TEL ０７６－４４２－４２４６
発行年月日	西暦２０１４年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
黒瀬大屋遺跡（くろせおおやいせき）	富山市（とやまし） 黒瀬字大屋割（くろせあざおおやわり）	16201	0549	36度 39分 20秒	137度 12分 23秒	20090324	(試掘)990	個人住宅 建築工事
						20090602 ～ 20090619	(発掘)50	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
黒瀬大屋遺跡	集落跡	古墳時代	土坑	土師器
		白鳳時代	溝	須恵器、土師器
		奈良～平安時代		須恵器、土師器、緑釉陶器
		鎌倉～室町時代	溝	珠洲焼、中世土師器
		江戸時代		越中瀬戸焼

要約	古墳時代の土坑３基、白鳳時代の溝１条、鎌倉時代の溝１条を検出した。古墳時代時代には小規模な集落が営まれ、白鳳時代は溝跡や周辺から須恵器がややまとまって出土し、当該期の集落の縁辺部と推測される。鎌倉時代は溝跡が検出された。南に近接する黒崎種田遺跡の集落との関連が推測される。

富山市埋蔵文化財調査報告６３
富山市黒瀬大屋遺跡発掘調査報告書
発行日　平成26（2014）年３月３１日
発　行　富山市教育委員会
編　集　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町１－２－24
TEL 076-442-4246　Fax 076-442-5810
E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷　中央印刷株式会社